

---

月 刊

---

# MéLange

---

Vol.151

---



---

2020.03.29

詩と評論

---

月刊「Mélange」

Vol.150 2020.03.29

「月刊めらんじゅ」編集部

詩

- 手紙 ……………田村周平 8
- 桜の木の下には ……………前田雅正 9
- 石灯籠 ……………中嶋康雄 10
- 黙雷のまにまに ……………大橋愛由等 11
- 動かない浄化 ……………高谷和幸 12
- 西へ、西を指差し ……………大西隆志 14
- 湾をめぐる ……………高木敏克 15

連載小説

- 3回目 / 「カフカ教団」……………高木敏克 03

評論

- 筒井祥文川柳句集 『座る祥文・立つ祥文』を読む②……………野口 裕 04

連載エッセイ

- 「益田っこ通信 No.38 いひおほせて何かある」……………元正章 13
- 神戸詞あしび 140 「〈性〉を媒介にした薩摩と奄美の贈与と交換の関係」……………大橋愛由等 16

編集部日より★71/終息の見えない新型コロナウイルスがひとびとに蔓延するなか、3月23日(月)、阪急神戸百貨店(旧そごう神戸店)で開催されていた「英国展」に向かう。大変失礼だが、こうしたデパートの各国展に英国が入ると、展示内容にありがちな当該国の料理の出し物が出典されるのが恒例となるなか、さて英国となると、「イギリス料理」なるものは聞いたことはないし、「世界で一番薄い書物が三冊あってその一冊が〈イギリス料理〉の本だった」という皮肉を当のイギリス人が語り継いでいるほどだから、「フィッシュ&チップス」以外なにかあるのかと訝しく思いながら会場に足を運んだのである。特設会場に入る場所にスタッフが待ち構えていて、アルコール消毒を促している。まさにこのご時世の象徴的な光景である。会場内で興味をひいたのは、イギリスの陶器類である。かの国はバーナード・リーチなど、日本の民藝運動に比肩すべき作陶文化が根付いている。会場を一巡したあと、私は会場奥に設えてあったスコッチウイスキーの立呑コーナーを見つけ、カウンターに仕切り板が設置されていてこれも当世風といえよう。コロナウィルス禍で、英国のパブも閉鎖されるほどなので、見知らぬ他者と接することを忌避する装置なのである。さてスコッチといえば、スペインのシェリー酒の産地・ヘレスと大いに関係がある。「シェリー樽に寝かせた濃い味のものを」を係員に所望する。そこは100種類のスコッチを用意している。わたしのスコッチに関する知識ははれていて、その知っている限りの情報を係員にぶつけてみると、丁寧に答えてくれる。スコッチ文化はまことに奥深いものだと感受したのである。/今月の「Mélange」例会第一部「読書会」の話者は高木敏克氏のカフカ語り「城」を予定していましたが、高木氏が体調不良であるのと、出席者が少ないと予想されましたので、残念ながら中止することにしました。(大橋愛由等記)

連載小説

カフカ教団 ③ 高木敏克

喫茶店カフカの建物はかなり古い建物でレンガの壁はところどころで穴が開いている。それは僕に似ている。僕の記憶にもところどころに穴が開いていて暗黒を覗き込むことができる。もしかしたら自殺したことがあるかもしれないし、もしかしたら誰かを殺しているかもしれない。そういう時には人間は記憶喪失になるものだ。罪を犯しているのにその罪を覚えていないから永遠に罪を償えない。償いたいからわたしの罪を覚えてくださいと城のある村を彷徨う愚かな父親の話はどこか僕に重なって見える。完全な記憶がない限り人間は多かれ少なかれ救われようとして忘れた罪を探しているのだ。なぜなら人間は怖いことは忘れてしまふ。抜け落ちた記憶はどこに行ったのか。喫茶店カフカの横のレンガの壁は大きくぶち抜かれて入り口になっている。

「あれは阪神淡路大震災の時に崩れ落ちた穴よ。だけどあの時のことは何も覚えていないのよ。思い出したくないからじゃなくて、本当に覚えてないの。気がついたら生きていたわ」喫茶店のママはそう言って少し笑った。「同類です。僕も生きています。記憶がなくて地震で誰かを殺した被告人ですよ。被告人は罪を思い出すために永遠に誰かに尋ねようとする。しかし何も悪くない人は話さない」「あら、二階の住人さんだわ。ご挨拶したら」二階の住人は僕より一足先に入居した女性で、外出する時にはいつもサングラスをかけている。そのことによって余計に彼女は目立つのだが、素顔を隠す点では成功している。彼女は完全に隠れようとしている。隠れる理由は美しすぎるからだ。彼女が透明人間か闇人間になりたい気持ちは少しわかる。美しすぎると人に見られて何も考えられないからだ。彼女はどこにも隙がないように思える。しかしよく見ると中途半端な微笑みや歩き方にも空気があ

る。その隙間にうまく絡めば物語が始まるはずだ。これは商売の交渉ごとと同じことだ。どんな建物にも隙間があるように人間に隙間があればどんな小説でも書ける。

喫茶店から二階に登るには地震で壊れた壁の隙間をそのまま改築した入り口のドアを押し広げて階段を登ればよい。僕も毎日使うことになった入り口だが大きな木のドアを開けると上りと下りの階段が続いている。左の階段を登れば彼女の部屋に右の階段を降りて行けばカフカ研究所の看板がぶら下がる僕の部屋に入りことができる。

いつものように彼女は何も言わずに階段を登って自分の部屋に入っていく。しかし、僕には黙って誘っているように見えて仕方がない。この建物の二階に住んでいること自体一緒に住んでいる相手にしか見えない。同じドアから出たり入ったりしているのだから、一緒に住んでいるようにしか見えない。そう見える以上、僕には彼女と一緒に生活できるのは時間の問題だと思えない。

「彼女はしばらく休職中らしいわよ。本社にお勤めらしいけど職場でもめぐりごとがあって、被告席に立たされているらしいのよ。なんでも職場の上司の身代わりにさせられて貿易相手から訴えられているらしいわ」

「へえー気の毒だなあ」

「そう思ったら、なんでも相談に乗ってあげなさいよ」

## 『座る祥文・立つ祥文』を読む②

野口裕

あり余る時間が亀を亀にした

句集の前半「座る祥文」は、生前発行のセレクション柳人からの抜粋。後半「立つ祥文」は、それ以後の未発表作になる。上揚の句から後半に入る。

以前出てきた自転車の後もそうであったが、句中に同じ単語が二回続く場合、二度目の単語を括弧で括ると、句の意味をはっきりと把握できるようになることが多い。

あり余る時間が亀を「亀」にした  
とやれば、作者の狙い所は見えてくる。

括弧で括った亀は、亀でありながら亀を越えた存在になる。そうなるための処方箋が、「あり余る時間」ではあるが、人の身ではそれをうかがい知れないという畏怖の念も込められているか。

ならひよいと栗がてらの旅にでも

上五の「なら」は、助動詞「だ」の仮定形、と検索結果をそのまま写す。数学の命題では、「A=B」なら「B=C」が成立する、というような形でよく使う。

ともあれ、句の前半に何かがあり、何かを受けて旅にでも出たらどうかと気分転換を勧める図。前段の事情の軽重が不明ながら、「ひよいと」であり、栗がわりではなく栗がてらとあるので、そう深刻な話でもないのかも知れない。

句の前段に何かがあり、それを消去した形の句の先蹤には、  
と言ひて鼻かむ僧の夜寒かな（高濱虚子）

がある。上五が四音であるため、上五のリズムを維持しようとする、句の先頭に一拍の休符が入る。上揚句の上五は、「なら／ひよいと」で文節の切れ目がそのままリズムの切れ目をうながす。前段の消去が、句のリズムにシンコペーションを持ち込むと見ることができそう。

何をおっしゃる別腹がございます

落語の一節から抜けたような句。元になった話があるわけでもないだろうが、「まんじゅうこわい」の後日譚にもなりそう。

尊敬語とか丁寧語とか、日本語のジャンルに確固としてありながら、ともすれば長くなりがちのため、定型短詩に利用しにくい語法を見事に生かした句。飲むのは抹茶か煎茶か、はまたた珈琲か。

帽子屋はギリシャ上空まで飛んだ  
どことなく、

旅客機閉す秋風のアラブ服が最後（飯島晴子）

を彷彿とさせるものを感じるが、多分評者の気の迷いだろう。まして、「不思議の国のアリス」の帽子屋と見るのはさらに場違いであろう。単に帽子屋のおっさんがヨーロッパ旅行に出かけた。そう見ておいた方がよい。下五の言い切りがそれを後押ししてくれる。

にもかかわらず、帽子屋に作者の仮託したものを見てしまうのはどうだろうか。帽子屋もイカロスになるのかな。

大きなことを小さな文字で書く人だ

確かにこんな人はいそう。句は擲論ではなく、少々あきれているぐらいの調子で書かれている。対象の人を優しく包みこむ話者の包容力を見せている。

むべなるかモミジもカネも風に散る

一読、百人一首の「むべ山風を……」を彷彿とさせる。それが狙いというより、思わず口を突いて出たという気分、で、「モミジもカネも風に散る」と続く。カタカナのモミジ・カネが索漠とした気分を良く伝える。

散るカネがあつただけまして、と言っておこう。

土壇場で左うちわを取り落とす

筒井祥文は、誰もが分かる句を毛嫌いするというスタンスを取らない。たった一人しか分からない句を取り出すこともやるが、その逆もやる。穿つて言えば、誰もが分かる句の中にある誰にもわからない部分を探ろうとする。

この句を普通に読めば、ドラマの悪役がしばしば演じるシーンを思わせる。通俗ドラマの悪役の役割は、いかに左うちわを取り落とすかにかかっていると言つても過言ではない。正義の味方をさんざんコケにした拳句に、ほんの些細なきっかけで見事に転落すれば、見ているほうはカタルシスを得る。そのときに悪役の内面はないようなものだ。句からそんな痛快感を得てもさほど不思議ではない。

五七五では、しばしば句の主人公は作者自身とみなされる。常に、「I see」あるいは「I say」または「do」となるが、川柳の場合、その原則は若干揺らぐ。「They say」や「He do」などがときおり混じる。

上掲句の場合、「IとHeが微妙に混交して、普通では取り違えることのない、誰かに起こった喜劇を私に起こった喜劇へと通す回路が用意されているように見える。句は痛快であると同時に滑稽、さらにそれが自嘲に繋がる。

オペラでは、同じ曲を別の歌詞で登場人物が同時に歌いだすことがある。それに倣って、この川柳を、同じ歌詞を全く違う心情で同時に歌いだしたものと見ると、読後はなほだ複雑な気分になること間違いなし。

飯頭も飯も初めは甘かった

初めを括弧で括ると意味深。Johnny・Mitchell「Both Sides, Now」(日本題「青

遺書の例文おもむろに笑い出す

途中、  
無い袖を入れた金庫がここにある

を挟む。最初二三句の鑑賞で済ませるつもりでビックアップしたため、すでに鑑賞済み。その時にこちらを取り上げて良かったが、彼の思い出を語る文を書いた際に文章の締めとして利用した。そこで、遠慮が働いた。多分、こちらを取り上げていれば、本当に二三句で終わったかも知れない。

遺書にして艶文、王位継承その他無し（加藤郁也）

鉛筆の遺書ならば忘れ易からむ（林田紀音夫）  
遺書未だ寸伸ばしして花八つ手（石田波郷）

ために遺書の句を並べてみると、遺書の句には、どうも作者の人となりが見映されるようだ。郁也の大見得、紀音夫のつぶやき、波郷の感慨、探せばまだあるだろう。国語力の落ちた現代人は遺書も自在には書けない。例文に頼れば、例文が笑い出す。祥文は遺書に笑いを見つけた。

広辞苑よりも分厚い野次が飛ぶ

野次を飛ばされた方は全く登場しない。野次とはそういうものなのだ。そんなに教養のある野次はあるのだろうか。という気もするが、知識の集成としての広辞苑ではなく、単に分厚さの比較として登場してきたことの無意味さを味わうべきだろう。

教養から無教養への落差、しかしひよつとして、野次の底に広辞苑なみの知が潜んでいるまいかと、一瞬考え込みそうになるが、まあそれはない。軽々と野次は飛び去ってゆく。

沖に舟あれどラッキョに義理はない

舟がなくとも、ラッキョに義理は生じないはずだ。辣蕪ではなく、ラッキョであるところにも言い切りの爽快さがある。

「沖に舟」は数々の物語に彩られてきた。「安寿と厨子王」あるいは、  
人買ひ舟は沖を漕ぐ とも売らるる身を ただ静かに漕げよ 船頭殿  
の「閑吟集」。

沖の暗いのに 白帆が見える あれば紀の国 みかん船  
とカッポレ。時代を下ると、阿久悠の「舟唄」。

哀惜にせよ、希望にせよ、舟は作中主人公の心中と繋がることで、世界と主人公の有り様を映してきた。そこに「ラッキョに義理はない」とやれば、しがらみを断ち切つて新しい世界の門出に向かう人の姿が浮かぶ。幸あれ。

面積はおかしいXおもしろい

Xを「かける」と読んで、きちんと五七五におさまるところ、「お：し：い」の韻。そして数学公式の茶化しと、手が込んでいる。手が込んでいるにもかかわらず、即席で出来たかのような印象を持たせる。

読者としては、おかしいとおもしろいの違いなどという考究に踏み込まないようにしよう。

春の光と影）の世界が立ち現れる。

「……も……は」と、テーマをこれでもかこれでもかと追い込む語法が印象的。

それがどうしたとトンビは風に乗る

祥文句がときどき見せる見事な句跨がり。

そうと決まってヒコキを遺書で折る

ころんと転がる一瓶の夜景

ラ・クンバルシタで蜘蛛が登場

いつも硝子は割れようと思つている

何をおっしゃる別腹がございます

遺書の例文おもむろに笑い出す

せつば話まればコウモリになつても

これまでのページから、七七五とならず、上五に文節が来ず上五中七が繋がって行く句（多くの場合七五五となる）を拾い出すと、これだけ拾える。このあとのページにも

京都を燃やす努々を夢にせず

賽を投げるとインチキと音がした

つべこべつべこべつべこべと刻む

焼けてみたらかと思うのも金閣寺

どこへ行くのかライオンが歩いている

駅のロッカーを笑わせねばならぬ

と続く。まだまだ評を書きたくなるような句が目白押しとなつている。

リズムの変則が読みに伴う無意識の流れを断ち切つて考察を強いるのか、とも愚考。

いずれにしろ上掲句、鳶の鮮やかな飛翔に目を向けるまでの屈折と、句のリズムの変則が際立つた照応をなす。

京都を燃やす努々を夢にせず

「ゆめゆめ疑うことなかれ」の「ゆめゆめ」が、漢字では「努々」と書くことがわかった。そこから「努々を夢にせず」と句想が浮かんだ。句の裏側に仮にこのような発想があったとして、常人に「京都を燃やす」と思いつけるかどうか。応仁の乱の再来を願うとは、橋本治の「江戸にフランス革命を」も驚嘆するような話ではある。

おそらく、「努々を夢にせず」は懐に暖めていた状態、意識的か無意識的かは分からないが作家内部に「努々を夢にせず」があつて、何かの触発で「京都を燃やす」と出てきたとする方が自然である。「京都を燃やす」はいささか突飛にも聞こえる。しかし、作家内部にその衝動があつたことは七五五の変則形式もあつて納得出来る。

作者が高卒直後に映画エキストラの差配をやつていた（これとても、伝聞推定事項なので以下に記すのはあくまでこちらの妄想である）ことを知ると、京都炎上シーンで逃げ惑うエキストラの人数を確保すべく、悪戦苦闘する若き日の祥文を想像したりもするが、これはあまりに句から離れた感想になつてしまうだろう。

立ち読み人の斜め読み

さてゴリラハイビスカスと言いたまえ
少々滑舌の怪しい酔漢が自分自身に向かって命令しているような気がするが、実物のゴ

こけしですちよつと詠りがございませす
時折、見受けられる丁寧語、広い意味での敬語を使用した作品群のひとつ。冗長になり

吉野家があつた気もする交差点
現代文明の担い手としての都会は愛を義務づけられている。アスファルトで区切られ

ドラゴンとゴンドラに目が二つずつ
ドラゴン、ゴンドラの言葉遊びに目が行きそうになるが、後半の「目が二つずつ」が句

秋の夜をパーテンダーは軽く振る
この句を仕込むのに、どれだけのカネをパーにつき込んだことか。年期が入っている

どこへ行くのかライオンが歩いている
上掲句が句会に提出された際、「ライオン」が如何にも陳腐と見て選ばなかった。ただ、

駅のロッカーを笑わせねばならぬ
筒井祥文流の「首が飛んでも動いてみせるわ。これを言ったからと言って、ロッカーが

死ぬまでのその夜その夜に通す腕
明らかに死期を意識しての句と読める。遺句集の中にあれば、なおさらそうなる。腕を

ハンカチを三度振つたら思い出せ
句集最後の一句。したがって、これを絶句と見なせる。
一度や二度振つたところでは思い出せないだろうという、読者に対する優しさとも諦念

無理した解釈では、「地獄」という名の弁当屋で、おかずの詰め合わせを注文した場面と
もとれるが、それで新たな読後感が生まれるわけでもない。素直に取っておこう。

人間を三人埋めて余る土
おそらくの話だが、加藤楸椰の
死や霜の六尺の土あれば足る

空瓶にすつと淡海節の風
淡海節で耳にこびりつくのは「後に残るのは…」のくんだり。句にあからさまに書いてあ

寝転んで一人で笑うのが仕上げ
寝転んで一人であらゆることを、
「公儀へ一万匹の鯉連れて

筒井祥文の遺句集をひもときながら一句一句に、それこそ一喜一憂する形で句評を綴つ
てきたが、さて彼の句業全体をどのように受け取れば良いのか、ただ呆然とするばかりで

水垢を水で洗えば佐渡おけさ
カッポレをちよいと地雷をよけながら
空瓶にすつと淡海節の風

など、七五調を基礎とする民謡、俗謡に対する関心は明らかだが、その関心の行き所が五
七五の拡張を目指す。

下五を肥大させる五七七の形式
くちびるはむかし平安神宮でした(石田終馬)

等、種々の詠法が考えられるが、祥文多用の形式は七五五のリズムで、
無い筈はないひきだれしを持つて来い

上5の切れ目に文節が来ず、七五五のリズムであると読み手が納得せざるを得ないものを
獲得している。(以下、次回)

## ◆手紙

田村周平

ご手紙と汽車がなくなつて  
歌謡曲の世界も寂しくなつてしまつた  
遺伝子工学とインターネットの  
ぼくらの暮らしも味気ない  
シューと出てゴトンと止まる  
汽車の響きは遠いけれど  
手紙は残っている  
ぼくの机の中に  
車窓から見える木々に  
紅い葉が目立ちはじめました

君の話す言葉が文字になつて  
ぼくに届けられる  
文字を読んで  
君の声を思い浮かべる  
五十年が過ぎて読み返しても  
君の声は昔のままだ  
海を渡つて届けられ  
空を飛んで帰つてきた  
日付変更線を二度越えた  
手紙を読んでいる  
古い紙の匂いと古い時の香り  
千の物語より心踊る物語

もう異国の生活に慣れましたか  
異国の生活を忘れてしまつた今なら  
どんな返事を書けばいいのだろう

## ◆桜の木の下には

前田雅正

南河内の弘川寺の桜の木の下には  
望みどおりに如月の望月の頃遷化した  
西行の死体が埋まっている

山科の随心院の桜の木の下には  
ぼんやりしている間に老婆となつた  
小町の死体が埋まっている

左京一条四坊の桜の木の下には  
人よりも花の香に故郷の昔を偲ぶ  
貫之の死体が埋まっている

西京の十輪寺の桜の木の下には  
世の中に散り急ぐ桜に心を乱された  
業平の死体が埋まっている

信州明科の田んぼの畔に築かれた塚  
キンと透き通つた風の吹き抜ける  
花の背景に真白き槍と真青き空が映える  
そんなシンと静かな桜の木の下には  
名も知れぬ村夫子の死体が埋まっている  
望むらくはこんなところに埋まりたい

# ◆石灯籠

中嶋康雄

石灯籠を久しぶりに撫でてみる  
 苔が座って読経している  
 つまらない嘘をいっばいつかれるので  
 だまされやすいふりをして  
 振込手数料もじぶんもちのふりをして  
 地面に見境が落ちてゆく  
 蟬の穴がある  
 若い蟬が出てくるので  
 ダンスを申し込むと  
 いやいやと尻をふられる  
 羅列を払うと  
 これじゃあ少ないと見下され  
 やっぱりいやいやと尻をふられる  
 むりやり強くぶよぶよの蟬の前足を握る瞬間  
 体の中の余分な水分で攻撃される  
 余分が臭う  
 余談まみれのびしょ濡れを石灯籠にわられる  
 石灯籠の屋根の部分もひび割れている  
 ひびの中に  
 蛾が棲んでいる  
 蛾の体は銀白の和毛でびっしり覆われている  
 中で死んだテレビ画面が発光している

電子乳牛を飼いながら発光している  
 ふさふさの蛾の頭を撫でながら  
 石灯籠と冷めたお茶を飲んで  
 縁側の板も腐ってかびがはえている  
 かびが胞子を発行している  
 胞子がおもちゃを欲しがっている  
 お店はとつくの昔に閉まっている  
 商店街はとつくの昔に廃れている  
 商店街の入り口の百円ショップも閉まったままで  
 シャッターに新規再オープン告知の紙が  
 破れて黄ばみかけている  
 石灯籠と冷めたお茶をまだ飲んで  
 湯呑みには漢字で魚の名前が並んでいる  
 すこしだけ上の部分が欠けている  
 大阪の鮭屋から黙って帰った  
 鮭屋のおやじを思い出す  
 「お互いにもう死んでしまったしなあ」  
 暇なのでそこにいる蛾にも話しかける  
 「おまえはみたこともない珍しい蛾だが  
 嫁はどういうふうにみつけるのか」  
 蛾はなににも答えない  
 「こんど人に戻ったら踏んづけてやる」  
 蛾はまだ黙ってじっとしている  
 「おまえみたいなやつが  
 いつでもいちばん損をするのだ」  
 唾を吐き捨てるが唾がない  
 石灯籠の脚のさぎのむずがゆい部分も  
 土に溶けてしまったのか  
 みみずが食べてしまったのか  
 石灯籠も傾いている

屋敷ももつと傾いている  
 加賀の匠にわざわざ頼んで  
 入念に手を入れたのだが  
 朽ちるのだけははやいらしい  
 屋根裏の白蛇も  
 抜け殻だけになってしまったし  
 壁の土も落ちて  
 落ちたへこみの隅っこに  
 不吉な蛹がくっついて  
 随分固い蛹で  
 いつまで経ってもかえらなままくっついて  
 ほこりで白くなっている  
 「おまえみたいなやつがいるから  
 よけいみすばらしいんだ」  
 じつとしたま蛹がこたえる  
 「おまえの墓にくっついてやるから  
 場所を教えろ」  
 下を向いて黙っていると  
 蛾が石灯籠に墓の場所をきいている  
 少しうしなつて  
 また少しうしなつて  
 また少しうしなつて  
 また少しうしなつて  
 また少しうしなつて  
 そういうふうにはうしなつづけ  
 もう少しうしなつて  
 今だけは  
 石灯籠も  
 忘れたふりをしてくれる

# ◆黙雷のまにまに

大橋愛由等

還らぬ者  
 の声と気配  
 を待つのは  
 なみなみと  
 茂った  
 常緑樹の老木の  
 うろに  
 ひそやかに隠れ  
 詩人たちにも  
 風たちにも  
 見つからず  
 煩悶  
 はにかみ  
 跛行  
 しながら  
 くぐもりつづければ  
 いいのか  
 いや  
 それとも  
 積み重なった  
 赤レンガの  
 隙に  
 いつのまに  
 挟み込まれた  
 鳥羽で刻んだ

詩片の  
 母語の  
 かなしみが  
 分泌され  
 月の影が  
 遺した  
 黒々の  
 息吹きを  
 わたしと  
 あなたと  
 わたしたちが  
 記述  
 できるまで  
 待て  
 というのか  
 それとも  
 里風を運ぶ  
 なみだ河の  
 河川敷の  
 あちこちの  
 線刻石を  
 震えながら  
 数え  
 ふるさとの  
 少女たちの

耳たぶを  
 赤くそめた  
 冬の精気を  
 小函に  
 いくつもいくつも  
 封じ込め  
 宙の蓋を  
 探し求める  
 あなたの  
 遠くをみつめる  
 まなざしを  
 うけとめるまで  
 ここを  
 動くな  
 わたしに  
 樹木になれ  
 というのか  
 あるいは  
 いまのわたしに  
 まとわりつく  
 日々の  
 灰青そして利休鼠の  
 パトスどもに  
 顔を背けながらも  
 是認してしまう  
 日常のさなかに  
 ぽちぽち  
 生起して  
 理にあらがう

なにか  
 そう なにかを  
 外套の  
 ポケットに  
 入れるとしても  
 根治しない  
 叙情を  
 手持ち無沙汰に  
 ぶんぶん  
 振り回し  
 星と星との  
 いさかいを  
 沈思することなく  
 れんこん畑を  
 鳴らない  
 口笛を吹きながら  
 歩きつづけて  
 到達した果ては  
 昼ざれの  
 鍵をもとない  
 少年の  
 玄関前の絶望  
 であつたことを  
 語りかける  
 他者が  
 みつかるまで  
 あなたは  
 現れようと  
 しないのか

## ◆動かない浄化

高谷和幸

太陽のフレア光線が降り注ぐ裾の部分。車窓へと丘と運河が近づき離れていった。「ドン」。ゲートが開く音がする。あなたを後ろから眺めていたわたしにとって「別の世界にいるあなた」が、崖っぷちに追い詰められていて、「あの排出口が開いてからすべてが始まった」。木製の玉が転がしだして、落ちていく玉の重さが音階のひとつの音の一つを奏でていた。背中を向けたあなたには、もう見ることは出来ないけれど、白い化粧で覆われた裏側で内蔵管のめくれた穴から乱れた周波数の歌を聞いているのかもしれない。「そうだ、スパイラル」落ちていくものがぶつかり、こすれあつて音を出している。あなたの筐体に天使の小さな羽根が生まれ、渦が吸い込まれる底から羽ばたかせていた。「沈むことは浮かび上がること」が、あなたの仕組んだほんとうの虚構だったのかも知れない。サピエンス（賢者）のパンツを洗う。二〇万年前に東アフリカの部族の片隅にあつた「その箱」はセットされた時間にスタートして、あなたの穢れたものを浄化する。始まりも終わりもない、指先で延ばして、フレア光線を平坦にさらすために。

## ◆益田つこ通信

はじめ  
元正章

▼38号／「いひおほせて何かある」〈2020.03〉

先般、高校同期会開催の案内（2年に一度）が届いた折、物故者が57名（400名中）という数字が目に入りました。73歳を迎えようとして、すでに約15%もの同期生が亡くなっているという事に、少なからず唾然としました。その中には、当然よく知った者もいるわけであつて、なぜ鬼籍に入ったものかその理由は分からずとも、他人事には思えませんでした。いずれは、私もその中の一員に属することになるのでしょうか、なぜ、それが彼・彼女であつて、私ではないのか、答えは出そうもありませんでした。その問いは、かつて妻の公子が突然死した時の素朴な疑問でもあり、それを「神の計らい」と言うには、かえつて神を冒瀆していることにもなり、あるがままに受けとめるほかありませんでした。振り返りみれば、交通事故など、いくたび危険な目に遭つたことか。なのに、今もこうして生かしてもらっています。

「いひおほせて何かある」（芭蕉）。「言い尽くしたからとて、それがいつたい何になるうか」。さりとて「秘すれば花」というのでもなく、「何も言わぬこそ、あわれなり」と、ふと思わないでもないのだが、やたらに饒舌ぶつっている昨今の自分でもあります。

「死ぬことは、誰かの心の中で生き続けること」（朝日新聞2018年11月29日号）。これは、「樹木希林さんが、友と交わしたことば」の表題です。文中、「役立つ人だけがいいのではない。困らせる人は己を磨く上で必要だ」とあり、それは、釈迦にとつては提婆達多、イエスにとつてはユダに当たろう。では、皆様方にとつては……。

## ◆西へ、西を指差し

大西隆志

小さな山容が浮く  
船も電車も言葉も  
目の前に形容され  
西へ進みゆくのは  
願いを胸にした人  
波形の書籍に託す  
歩いた痕跡を記す  
物語にあらわれる  
動物の来歴を頼み  
星の配置を地上に  
枝の旋律が墜ちる

無文字の人たちが  
昏を震わせている  
森の散歩者の瞳に  
飛びまわる蜜蜂と  
ゆつくり進む季節  
西にひろがる海に  
浮かべるのは虹箱  
入っていたの雨滴  
少女が飼っていた  
水蛇の去った後に  
残された時間には

指差しながら瞑想  
草が風に靡いては  
大地を西に向かう  
選べること限られ  
西日を浴びた斧が  
二人子どもを奪う  
貧しさにぎざまれ  
西で鳴く啄木鳥は  
光と闇をつぎだす  
廃れた都を離れて  
隘路を進む自由へ

## ◆湾をめぐる

高木敏克

阪神電車でわたしは目を閉じたまま読書している夢を見ている。しっかりと活字を追いながら物語の展開に身を任せているのだが、それはすでに夢であった。夢は小説を塗るかえ必ず行き詰って悪夢になる。抜け道のない苦しみから目が覚めると再び本を読みはじめののだが、小説なのか夢なのかわからない。確かなことはわたしは阪神電車の中で小説を読んでいることだけだ。だが書かれてもいないことを夢の中で読み、書かれたことを目覚めて読みゆくうちに、わたしは夢の中に閉じ込められていることの気がついた。夢の中にいるわたしはもう何処にいるのかわからない。わたしは読者なのか作者なのかわからないまま読んで書いている。

夢の中では意味のない着信音までなんらかの意味を持ちはじめ。どこかで携帯の着信音が鳴りはじめて、ホンマニアンタチアホチャウノと聞こえた。この明るすぎる海辺の乱反射の光と音が錯乱の原因だ。過剰な記憶が物語の反乱をもたらすのだ。わたしは寝ても醒めても過剰な物語と固有名詞にうなされつづける老人である。働きすぎが病気の原因で、なにしろ大都会の大企業に勤めたわたしは勝たなければならぬ。大きく複雑なものが小さく単純なものに必ず勝つというのがわれわれのセオリーなのだから。都会は地方に、大企業は小企業に、国家は国民に大きく複雑なシステムの構築で勝つ。複雑で巨大なシステムは個人には理解できない。つまり

個人はシステムの複雑さに騙される運命にあるのだ。

海岸線の湾曲に気づくのは自宅に帰る時である。職場を出て北西に向かうとやがて山脈の闇の重さを感じる。山は重すぎてその引力に引かれてわたしは帰宅するのだ。山の闇は山の影ではなく質量の闇である。隆起したマグマが静かに冷めながら固まる暗黒がいつもむこうに見えるから六甲山の昔の読み方はむこ山で武庫山とも書くとか、夜になると海鼠の山の目が開くとか、高取山では闇を登るタコが取れたのでタコとり山だとか、山の上まで漁師が住んでいた証拠みたいだ。

陽が落ちると山は闇を孕み平野にも海の中にもわたしは溺れはじめる。「わたしの中にも闇があるから溺れて」と巨大なシステムがいうからわたしの闇はみ出して湾岸を這いはじめる。わたしの生みの親はやはりこの闇であり母胎回帰の祈りがこの湾をめぐる通勤なんですと応えようとしたら巨大システムが支配する会社の着信音がまた車内に響き渡った。ホンマニアンタチアホチャウノ

これは人間をあざけ続ける巨大システムの本音の言葉なのか。

わたしの目覚める方向はテレビのある明るい都会の日常でない。あの帰るべき六甲山の古代人の呼び方はもしかしたら「向こう闇」かもしれない。

湾をめぐると見えてくる。墳墓群が夕焼けで黄金に輝く対岸から見れば大都会の大阪にはコンクリートの墓場びっしりと立ち並び、その果てに夕日の逆光の中で六甲山の闇が黒い夢の掛け布団を持ち上げてわたしを待っているのか。



モースやサーリンズといった文化人類学者が積み重ねてきた太平洋諸国における「王権論」に関する研究「贈与論」について触れる機会があったので、それを奄美にひきつけて考えてみた。

これはFMわいわい奄美専門チャンネル「南の風」の三分の番組で、「令和時代と王権論を考える」というテーマのもと、山中速人・関西学院大学教授をゲストに迎え語り合うことの打ち合わせのなかで、山中氏がモースについて言及したいと事前に連絡があった。

モースの「贈与論」の骨子のひとつは、①「与える義務」②「受け取る義務」③「返礼の義務」で構成されている。贈与は交換を前提としている。これを近世における薩摩藩と同藩が実効支配していた奄美群島との関係におきかえてみた。

まずその前提としてモースが考えるこの三つの「義務」を記述してみよう。

①与える義務 与えるのを拒んだり、招待をしないのは、戦いを宣するに等しい。

②受け取る義務 贈り物を受け取らなかつたり、結婚によって連盟関係を取り結ばない、といったことはできない。受け取りを拒むのは、返礼を恐れているのを表明することにもつながる。

③返礼の義務 この義務を果たさないと、権威や社会的な地位を失う。権威や社会的地位が財や富に直結する社会では、返礼が激しい競争をもたらす場合がある。さてこれを奄美に適用してみよう。それは、藩政期における奄美に赴任した薩摩藩士の現地妻（島妻）についての「性」を媒介にした贈与と交換の関係である。これを先に示した三つの「義務」にあてはめてみよう。

①与える義務 島津軍は一六〇九年に奄美群島に軍事侵攻。琉球王国の領地だった奄美群島を実効支配することになる。統治のために薩摩から派遣された藩士に対して、その任期中に、シマ側に対して、島妻となる現地妻を要求した。これはシマ側から薩摩側に「性」を提供していたことになるが、異なる視点から見ると、薩摩側からすれば支配者として

の地位をシマ側に顕現する「与える」ことに付帯する行為のひとつとしてみなすこともできよう。

②受け取る義務 島妻の提供は薩摩側からの制度的な要求なのか、あるいは慣習的なものであるのか実証的に確認する必要があるが、どちらにせよ支配者である薩摩側からシマ側に強制したものと思われる。シマ側には島妻を提供することに對する反発、嫌悪が根強かつたのは確かだ。「むちや加那節（奄美大島）」「三京ぬ後（徳之島）」などシマウタにも歌い継がれている。

③返礼の義務 この藩士の赴任期間に生まれた男子は、任期が終わり帰藩した藩士のもとにひきとられ郷中教育のもとで薩摩藩士として育てられる。成人すると島に帰り、島役人として赴任することが約束された。島の支配層となり税免除などといった「返礼」の特典があった。こうして増殖する「性」の交換は薩摩側にも都合がよかつた。つまり薩摩が奄美を統治した当初、島を統治する支配層は、琉球王家とつながりを誇りとするユカリツチュ（由緒ある家系）が占めていたが、それを薩摩系の支配層が、それを薩摩系の支配層

### 〈性〉を媒介にした薩摩と奄美の贈与と交換の関係

（島役人）が増えることによって、奄美の統治がしやすくなるという効果を生んだのである。同時に奄美の支配層にとつても「島妻」の提供↓生まれた男子の薩摩での教育↓島役人として帰島することで、一族が薩摩士族と姻戚関係となり自分たちの支配者としての権能がさらに補強されるという実利が付帯したのである。こうした「性」の「贈与」と「交換」を媒介とする支配構造の背後に控えているのは、薩摩藩の藩主という「王」であることも忘れてはい



古仁屋のウタシャたち

けないだろう。

詩と評論

月刊「Mélange」Vol.151

神戸

2020年03月29日 通巻151号

発行所/月刊「Mélange」編集部

〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F

編集・発行人/大橋愛由等(「Mélange」同人)

maroad66454@gmail.com

定価 600円(税別)